

4. 言語訓練の取り組み

言語聴覚士 関岡直江

【はじめに】

前頭側頭葉変性症（FTLD）（前頭側頭型認知症、進行性非流暢性失語、意味性認知症）の人をケアする現場では、前頭葉症状（常同行動や反社会的行動など）や言語症状（進行性の失語症によるコミュニケーション障害）に悩んだ末、行動制限や放置といった対応に陥りがちである。

これまで FTLD の人のケアは、1対1の対応がよしとされ、集団生活にはなじみにくいと思われてきた。しかし今回、デイサービスという集団生活の中で、初期症状の人に実施した専門職による言語指導の可能性と、集団生活から得られる言語能力の維持について示唆が得られたのでここに報告する。

【目的】

ことばの不自由さに強い不安をもつ若年性認知症の人に対し、デイサービスという集団生活の中で、コミュニケーションをとりやすくすることを目的に、言語聴覚士（以下、ST）による言語指導を含んだコミュニケーション支援を試みた。

また、デイサービスという場において、集団の中で他の利用者さんとのコミュニケーションを取りながら、また別に専門の言語指導を受けることによって、家庭においても自主的なことばの練習をすることが、日課となるよう支援することを目的とした。

【方法】

【事例】 A氏 男性 58歳

- ・仕事は、自宅で印刷関係。性格は、几帳面で礼儀正しい。無口で、短気な面もある。
- ・趣味は、ゴルフや野球、カラオケで、石原裕次郎の歌の歌詞を覚えている。
- ・仕事では物忘れが多くなり支障をきたし、家庭では洗濯機の使い方がわからなくなったことから病気ではないかと気付いた。
- ・診断は、前頭側頭型認知症。言語障害については検査等の情報なし。

【場所】 大阪市北区にある、デイサービスセンター「かみやま倶楽部」内の個室にて実施

【期間】 2013年10月から2014年3月まで 計17回 週1回程度 1回約20分から30分

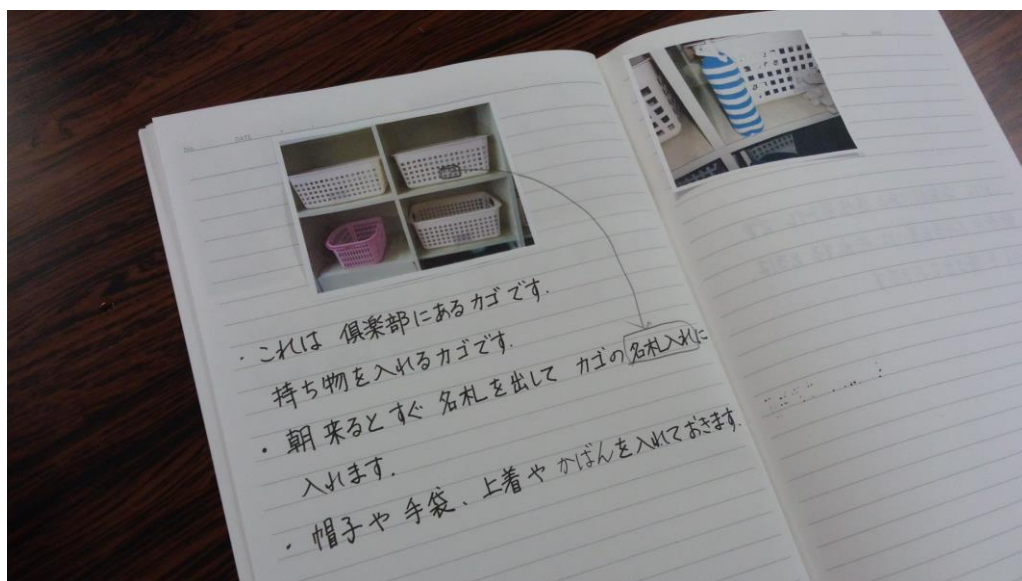
【言語症状】

- ・語想起障害があり、家庭でも妻との会話で苛立ち、怒りを爆発させることもあった。
- ・本人は、「ことばが出にくい」と訴え、「説明がむずかしい」ため、外出をしなくなった。しかし、「スムーズに話したい」という希望がある。

【経過】

- 1 STは、本人とのラポートを得るため、デイサービスの集団活動と一緒に参加する。朝の自由会話、ラジオ体操、昼食、アートワークや散歩などの活動の中で、他の利用者さんとの会話を促がしたり、本人のことばの状態を聴取した。
- 2 STはことばの相談事になる仕事であることを話し、心配であるなら指導できることを告げる。呼称、復唱ができるか試みる。場所は他の利用者さんも居る、いつも座っている席で行った。

- 3 次週、本人のほうからことばの練習を促がされる。場所を個室に移し、時間も決めて、実質的な言語訓練を始めた。
- 4 ことばの練習用のノートを作る。家庭においてもノートを開けば、デイで行った練習ができるように、使用した絵プリントや写真、音や文字の表を貼った。



かいみやま倶楽部の中で利用するものを写真と文字で示したノート

- 5 若年性認知症の意見交換会（東京で実施される予定）での発表原稿の練習をする。本人がインタビューされたときの発話文をまとめ、復唱から始め、次に一人で文字文を眼で追いながら声を出す練習をした。
- 6 言語指導の終了に近づき、一人でもできるようにノートを作り変えた。「自己紹介」「自分がことばで困っていること」「カレンダー」「構音と文字のための表」「1日1曲」「毎日運動」と「生活に必要な語プリント」そして、家族から要望のあった「出かける時の手順」のページを設けた。
- 7 ことばの練習の時間は変えず、場所を他の利用者さんのいるホールの机に移し、スタッフの前で、ノートを見ながら指導した。

【結果】

デイサービスという集団の中で、他の利用者さんのいる所で、どのように本人とラポートを取って、言語指導の導入をするか気を使ったが、前の週に行っていた簡単な練習を覚えていて、本人の方から自主的に練習をしたいと促がされた。そこから場所を個室に移し、時間も決めて言語訓練に入ることができた。本人との馴染みの関係をまずつくるのが必須であることがわかった。

呼称課題などをするうちに、本人が「ことばが出にくい」音の連なりなど、努力性の発話が観察された。そこで、本人の強い不安を取り除くため、まずその「出にくさ」をSTが理解していることを絵とことばで見せて知らせ、ことばの4技能の練習が必要であることを理解してもらった。そこからできるだけできる機能を使って成功体験を積み上げた。復唱が可能で、短い文であれば全文、長くな

ると後半部分はできた。構音は全音可能。できることを自覚してもらい、褒めて自信を持つよう促がした。文字を書くことは、練習課題は作ったが、本人がしていないので、それ以上は進めなかった。

呼称課題も繰り返すうち、自分からできる課題が多くなり、構音課題のフレーズも記憶しており、家でも練習していることがわかった。ノートを開くことが習慣化すれば、ことばの練習が日課として定着する一手段になり得ることがわかった。また家族と連携して、忘れ物がないよう注意事項なども写真など使って見せることで、出かけるときの気づきを促がすことができることがわかった。

【考察】

STとして言語指導をK氏に実施したわけだが、スタッフや家族と共通して使えることばとして「スピーチセラピー」とした。しかし、正確にはセラピーではないので、本人に対しても、今後「ことばの勉強」「ことばの練習」という言い方を使ったほうが、スタッフや利用者さんにもわかることばとして適切なのではないかと考える。

今後は、言語症状も進行し、構音に歪みが出て聴取しにくい音が出てくると思われる。また構文も複雑なもの、例えば修飾節の長い、従属節のある文などは、聞いて理解しにくくなってくることが予測される。できるだけ短い文で、感情の抑揚をつけ、表情豊かに表現することが、話し手側に必要になってくると考える。スタッフや家族にも伝えて、本人が言葉でコミュニケーションが困難になり、苛立ちや孤独感を多く持たないように支援していく必要がある。

今回、Kさん自身の努力もあり、少しでも不安を取り除き、前向きにことばに関わっていく姿勢ができたのではないかと思う。

進行性の失語をもつ認知症の人への言語訓練は、現在のところ回復できると評価される練習方法はないと言われている。しかし、集団の中で自分の存在を確認できるように言語指導も行われる可能性が示唆されたと考える。

【今後の課題】

自己の言語症状に強い不安を訴える認知症の人への、専門の言語指導がきっかけとなって、日課となり、家庭でもノートを開きながら、一人でも練習する時間が持てるようになれば、家族にとっても介護負担感を軽減することにつながると思われる。今後、デイサービスにおいても周囲のスタッフや他の利用者さんの支援が、ノートを挟んでできるようになることが期待される。

今後、STの感想と、家族の感想・要望をすりあわせながら、専門の言語指導を行う環境が整えられることが必要であると考えられる。専門の言語指導の有効性も検証されるべきである。